

湖南の禪宗の特徴

鈴木 哲雄

南宗禪の發展は六祖慧能の住した広東韶州より湖南江西等への進出から始まる。湖南の石頭、江西の馬祖は二大士と称され、心ある者はこの間を往来し、禪の枢要に迫ろうとした。特に馬祖下からは多くの俊秀を出し、全国に散じて、一気に南宗禪が中国仏教の主流となつていったのであった。晩唐より五代、そして宋代に至つて江湖の禪宗は一層賑わい、その上浙江に中心を移し、江蘇福建等を含め、広く揚子江南域にその盛況の範圍を広げていった。ここでは南宗禪の中心を占める湖南を取り上げ、禪宗が地方に發展する中で、どのような地方的特色を生んだかについて整理してみたい。

禪宗初期の南嶽の位置 盛唐から中唐にかけて南嶽は湖南地方の禪宗の一大拠点となる。南嶽に流入する主な経路は、広東から北上して南嶽に入る流れと、北の嵩山や洛陽及び長安から南下して南嶽に入る流れとの二つである。前者は慧能下の南宗であり、後者は普寂下の北宗と荷沢下の南宗である。南嶽は南宗を中心とし、北宗も流入した合流地点となる。

る。北上には慧能を祖とする祖統意識があつたと思われ、南下には都から地方へという、時流に添つた拡散であつた。南宗意識の明確な荷沢下も流入することによって、南嶽は南宗の中心的役割を荷うこととなつたのである。その代表者が南嶽懷讓、石頭希遷であつた。また明瓚によつて代表されるように、南嶽においては北宗の南宗化という傾向もあつた。そして南嶽の弟子の馬祖が江西に出、江西の青原の弟子の石頭が南嶽に入るといふ交叉出入によつて、湖南と江西とは石頭下馬祖下の密接な交流と相俟つて、南宗禪の中心となつたのであつた。南嶽はそれを代表する一大拠点であつたのである。中嶽たる嵩山が菩提達摩の修道地とされ、慧安や普寂等が住し、特に北宗系を中心とした禪宗の中心地となつたことと対比すると、二大聖山を占めながら、しかも北宗と南宗がそれぞれを拠点としたことで、好対照とならう。

南嶽は古くから道観も多く、道教の聖山でもあつた。慧能の正統を主張する『宝林伝』が南嶽で成立したものとみれ

ば、緯書の影響を受けていることも充分頷けることであり、南嶽における初期禪宗の特徴の一齣であったといえる。

南嶽から長沙へ 中唐以降、禪宗の中心は徐々に南嶽から長沙（潭州）に移り、一方瀟山石霜山等を挙げて例示すれば明らかのように、長沙の周辺に拡散していった。この中心の移動は各地にみられる共通の現象であるが、それは地方が力をつけてくると共に、都の絶大な権力が相対的に低下していったのとは時期を同じくしていた。但し初期禪宗の場合、北宗が都、南宗が地方（地方の地方）という図式を立ててみるならば、中唐以降は都を地盤とした北宗が衰えるのに対し、南宗は地方の地方から地方の中心都市へと求心性が表面化してくる。五代時代に入るともっと収斂傾向は顕著となる。湖南地方の場合もほぼ同様であるが、唐末五代初に収斂傾向があらわれ、そして五代末宋初は著しく衰退する。この衰退は楚国の混乱のためであった。

南嶽から長沙への中心の移動は初期禪宗からの訣別であった。初期禪宗の最大の眼目は南北両宗の競合であったから、北宗が衰え、南宗のみとなつては、嵩山に対する南嶽の意味は消え、南嶽が南宗の磐ではなくなった。五嶽は皇室が天帝を祀る山で、特に皇室が尊重する山である。唐室の衰退は南嶽のもつ宗教性をも相対的なものに低下させていくであろう。それに代るものは地方権力の中心地である地方中心都市

である。湖南地方においては長沙がそれであった。

また湖南は経済の中心でもあり、湖広熟せば天下足るといふ全国最大の稲作地帯である。唐室の実質経済支配がだんだん狭まっていっただけに、揚子江右岸の穀倉地帯を実効支配するためにも、有力な者を觀察使や節度使として差向けた。そういう中で、崇仏家はその土地に化を張る禪宗に帰依した。裴休などはその代表的人物である。ところが牛李のような党派の争いとなると、また恰好な流謫の地ともなった。彼らもまた多く禪宗に帰依した。そういうことで、南嶽から長沙へと禪宗の中心が移つたのである。

長沙と朗州澧州 唐末より五代初にかけては朗州や澧州も仏教が盛んとなった。澧州の葉山が早く、続いて竜潭寺、夾山、欽山、洛浦寺等、朗州の徳山、梁山、大竜山等がその主たるところである。朗州は『読史方輿紀要』に、「隋唐以来、湖北の襟要となる」というように、また「ただ荆湖の唇齒のみならず、滇黔の喉嚨なるか」というように、荊州から湖南へ必ず通らねばならぬ陸路の要地なのであった。故に雷彦恭は馬希萼と対決して譲らず、王逵は江湖の險を背景に長沙に兵を進めることができたのである。澧州もほぼ同じで、これらの地が潭州と江陵を望む要地であつたから、長沙に対して独立的気運が高かつたものと思われる。馬殷も澧朗二州を最後に帰伏せしめて、それで湖南を統一できたのである。この

地に住した葉山惟儼、夾山善会、欽山文邃、洛浦元安、徳山宣鑑等のシビアな態度は、その土地柄の氣風を考えると、一層理解を深めることができよう。

楚国と禪宗 蔡州（河南）に拠を置いた秦宗樞の党が散じて盜となり酷烈であつたので、それを蔡賊と呼んでいたが、馬殷もまたまぎれもない蔡賊であつた。劉建鋒の死後、跡を受けた馬殷は湖南を支配し、江西の一部や広東の一部にまで支配を伸ばした。馬殷の一生の大半は支配確立のための戦争であつたが、そんな中でも仏教特に禪宗に対する外護はあつたようである。『景德伝燈録』や『宋高僧伝』等に出てくる「馬氏」とは、殆ど馬殷とみて間違ひなからう。彼の禪宗への帰依は、深く仏法を理解した結果というよりも、他の国王もそうであつたような、仏教のもつ文化性への憧憬であつたと思われる。馬殷は唐朝を模して長沙に天冊府を開き、楚国を建てるが、それは国家としての体裁を整え、文化を模倣し、国王として權威を確立することにあつた。禪宗への帰依もその一端であつたとみられる。また仏教を通して民衆を慰撫する意図もあつたかもしれないが、それは表われていない。それよりも後任の僧の任命もしくは干渉差配によつて、動静を伺うという点もあつたように思われる。湖南の西部及び西南部は少数民族の支配地域で、それを帰属せしめ、朗州潭州のようにそれと通じているところを最後に支配下に入れ

ることができた。王はそれらに對し細心の注意を払つてゐた。禪宗とてこのような權力の埒外に置かれることが可能であつたとは思えない。大哥和尚と呼ばれていた石門獻の夾山入寺は衆に請われて入寺したというような單純なものではなく、馬殷の政治的配慮が大きく働いていたのではないかと考へる。

馬殷は梁への献貢にお茶を用いた。そのため都まで要所に邸を設けた。それを各国へのお茶の販路に活用して巨万の富を得た。またはじめて養蚕を行ない、富国に努めたので、國威は大いに振つた。仏教擁護もその富力による。但し正史類及びそれを補う史書類には楚國の仏教に関する記事は皆無に近く、金石類はそれ自体少ないが、それにも仏教の記事は殆どなく、閩や呉趣のような過剰なまでの仏教擁護はなかつた。馬殷の仏教に對する態度は極めて常識的なものであつたと判断される。

馬希範も天冊府を置いた。更に会春園を開き、嘉宴堂、金華殿等而建て、巨万を費したために用度不足となり、國中に加賦した。そのため逃民が続出した。また財の多少で官の高下を決めるというほどにもなり、蓄財を使い果たしてしまつた。馬希範には仏教護持の記録も見えず、この頃になると仏教は衰退し、禪宗も見ざるべきものになつてきている。総じて楚國は仏教に冷淡であつたといえる。そして呉越、南

唐、蜀への流出の方が多くなっていた。

葉山の問題 葉山を知る上で考えなければならぬ問題は少なくとも三つある。一には嗣承の問題、二には石頭の塔の建塔に名を出していないこと、三には李翱とのことである。結論を出すまでに至らぬが、見解を述べたい。第一については、唐仲の「豊州葉山故惟儼大師碑銘并序」では、石頭、馬祖、中嶽洪に学んだとし、中でも馬祖に二十年学んだというのである。この点については既に指摘されていることでもあるし、筆者も別に論じたので再論を避けるが、馬祖に二十年学んだというのはどうであろうか。葉山が石頭を嗣いだとすることは燈史類の皆是認するところであり、それを碑銘を論拠に否定しても学問的にはあまり意味がない。葉山の宗風は馬祖下の者によく似ている。変化してくるのは雲巖からである。第二については、『宋高僧伝』に石頭の塔を建てた者に、慧朗、振朗、尸利、道悟、道銑、智舟の名を連ねていても、葉山の名が見られないことである。貞元初（七八五）葉山に入ったから、石頭の寂年（七九〇）には葉山の経営に当たっていたはずである。葉山が牛欄からはじまるという全く第一歩からの出発で、種々の事情があったであろうが、石頭下の錚々たる人物の中に葉山の名が見られないのは一見奇異に感ずる。しかし建塔の場合、中心人物が顔を揃えるという方が一般的でなく、却って石頭の場合の方が特異であり、その意味を考

えるべきであろう。

宋高僧伝では葉山を護法篇に撰している。贊寧の分類が妥当であるかどうかは論議もあろうが、葉山の場合は李翱との関係によるからであろう。李翱は翰愈の門人で、『復性書』を著わして、翰愈と共に宋代理学の先蹤となった。その李翱が朗州刺史として赴任した。相見には緊張感が漲る。李翱は葉山に信服した。復性書は仏教の影響を表にあらわさないが内に持っているといわれる。葉山を護法篇に入れたのはこのようなことを考慮したからであろう。李翱は仏教に対して厳しい目で見ていた。それはやみくもの仏教批判ではなく、自己の学問に照らしてのものと考えられる。葉山寂後、李翱が湖南觀察使になっていた時のことと思われるが、近城の墳塔を尽く毀すという挙に出た。しかし東寺の塔のみは「独りこの塔を留めて以って賢愚を別つ」と題して残した。華浮行を伴わぬ仏教者には忌憚のない批判がなされたのである。李翱は会昌四年頃没したとされるから、会昌の破仏は見なかったわけであるが、破仏への警鐘であったとみてよからう。

石霜派の構成 石霜派は後世ついに一宗を形成しなかったが、唐末五代初においては湖南で最大の派を形成していた。派の形態を整えるのは石霜慶諸（八〇七—八八八）が瀏陽の石霜山に入ってからということになるが、いつ入山したかで石霜派の性格を考える判断にかなりの違いを生じるであろう。

祖堂集は八四一年入山とし、伝燈録は、道吾の入寂地に関する文面を通してみれば、道吾の入寂（八三五）以前のこととなる。しかしこの二説とも妥当と思われない。再説する余裕はないが、宋高僧伝、伝燈録、禅林僧宝伝で、二十年間山を出ず山院に終る、としていることを踏まえ、ほぼ八六九年ごろ、つまり洞山入寂年ごろ石霜山に住したと考える。この場合伝燈録にいう次の記事は重要である。石霜が世を避けて瀏陽の陶家坊に混俗していた時、洞山が僧をして訪尋せしめ、それで囊錫が露われ、石霜山に住せしめた、ということである。更に宋高僧伝でも、「洞山新たに滅し、俄かに遠方の禅侶のために困遶さる」と述べて、洞山の徒が石霜に流れたことを言っている。石霜は洞山の推賞によつて出世し、洞山のはからいもあつて石霜山に住したのである。道吾下の石霜は道吾下の者を摂し、更に洞山下の者を摂して、一躍衆五百を擁する大叢林となつた。

道吾と雲巖の親近が洞山と石霜にも及び、江西の曹洞と湖南の石霜が非常に親しい関係にあつた。湖南の瀏陽から江西の高安へは、潭州（長沙）と洪州を結ぶ交通の要路で、以前から交流が激しかった。この時期には特に道吾下が江西に流れ、洞山下が湖南に流れ、この動脈は両派の影響下にあつた。道吾と雲巖、洞山と石霜は基本的にごく近似的な宗風であつたと察せられよう。その上石霜は僖宗の子である竜湖普

聞を弟子としていたから、衰えたとはいへ、唐室との関係も深く、その保護もあつて、唐末には湖南の禅宗の一大拠点ともなつたのである。

しかし五代時代に入ると石霜山は急激に衰退する。それは唐室との関係が深かつたことも一因であろうが、そして何よりも楚国が短期間に滅びたことが最大の要因であろうが、曹洞との親近性が逆に衰退を早めたとも考えられよう。

夾山の文学的表现 禅宗は文学的表现を早くからしていた。それを最もよく示すものが偈頌であろう。伝法偈は最も古い部類に属するが、個人的には荷沢の五更転から始まつて、石頭の参同契草庵歌、丹霞の翫珠吟等のごとき偈頌が多々ある。それが香巖や洞山あたり以降になると特に顯著となつてきて、偈頌でもつて禅の境地を表現しようとするのが一つの型とまでなつてきた。伝法偈も遺偈となつて継承された。しかし偈頌はあくまでも禅旨の表白であるから、情感感慨を主体とする文学のジャンルにある詩とは似て非なるものである。偈頌は文学ではないと結局は言い得ることであるし、また禅の立場からすれば言わねばならぬことであるが、晩唐からそれ以降となると、文学としての詩と区別のつきにくいところまで接近してきている。それは感情の動きというような面ではなく、自然の描写を通してその奥にある自然の理を表わそうと表現されている場合についてである。このよ

うな詩は古くよりあったが、とりわけ陶淵明が先駆的役割を果たしている。李白等の唐代の詩人も多くこれを学んだ。偈頌が詩の方へ接近していくと同時に、文学の側からも山寺や山僧等の仏教に関することに題材を取ることが多くなってきた、両者が接近してきた。この原因はいろいろあると思うが、まず第一に、文章や詩は教養として必修であり、科擧に応じようとして学習し、僧に転じた場合など、詩的表現が自在になされたことである。例として香巖等が挙げられる。第二に唐代にあって詩が盛行したことである。第三に詩僧といわれる人が出てきていることで、文学と仏教の交流がなされたことである。第四に地方に出た官吏は、僧と交流することによって知的満足が得られ、渴を癒すことができ、その交流に詩の贈答があったことである。第五は第四と同じであるが、官吏が仏教帰依者の場合、文学的表現が禪の境地の理解を容易ならしめたるうからである。第六にそして何よりも詩のもつ含蓄が禪の境地を表わすのに適合するからである。

禪宗の場合、それが偈頌だけでなく、問答についても詩的表現となってきた。この傾向は古則の著語にも表われてきて、宋代には拈提の中心的な型とまでなっていた。このようにみると、禪宗は伝法偈という型が発端ではあるが、自然発生に近い形で詩的表現がなされるようになった。ところで禪宗の言葉が文学と極度に近づいていったのは、

いつごろ誰からか、ということが問えるであろうか。箇々にみていくと、種々の人の種々の表現の中に濃淡の差をもちながら、文学的表現も多々みられ、晩唐より時代が下がる程に多くなってくるし、湖南だけでなく、江西でも浙江でも傾向は同じであるが、最も顕著なのは夾山善会であろうと思う。夾山一人においてだけならば、名を指摘することも躊躇を感じるのであるが、夾山の弟子たちにもその傾向は著しく、これは夾山一派の特徴であったとみなしえる。それが他派にも影響を及ぼし、それで十世紀に入ると、湖南江西を中心に、禪宗が著しく文学的表現を増していったと考えられる。禪宗第一の書といわれ、文学的香りの高い『碧巖録』の名の由来は、周知のごとく夾山の「猿は子を抱いて青嶂嶺に帰る、鳥は花を銜ばんで碧巖泉に落とす」から出ている。夾山は文学的表現の祖といつてよからう。夾山の文学性は湖南の澧州という風光の秀でた土地柄と人格の融和によるが、船子の「垂糸千尺、意は深潭にあり、鉤を離るること三寸」の活手段である。

禪宗にはいろいろの宗風があるが、棒喝をもって行動に訴える限りにおいて、言詮の方が第二義的手段となるから、文学的表現が乏しくなるのも当然で、言詮が中心となる曹洞宗、雲門宗、法眼宗系統に詩的表現が豊かとなる。但し日本の場合には別の考察が必要となる。 (愛知学院大学助教)